建築組パックス有限会社

終の棲家を古民家風に 県産材使いリフォーム

「リフォーム」と一口に言っても、クロスの貼り替えから、家全体を新築並みに変える大掛かりなものまでいろいろあるが、『古民家リフォーム』となると、イメージは絞られる。『古民家』と聞いて脳裏に浮かぶのは昔の農家で、広い板の間に囲炉裏があり、高い吹き抜けに幾重にも架かる梁が煙に黒くいぶされている――誰しもそんなイメージを想い描くだろう。子供たちが成長し、夫婦2人に戻った暮らしを、古民家風にリフォームした〝終の棲家〟で送りたい――その念願叶ったT様邸をご紹介する。

古民家リフォーム

ユーザー訪問

T様邸

DATA

八戸市江陽　2017年7月竣工

■延べ床面積／46.71坪（154.43㎡）

■使用青森県産材／スギ（柱、外壁）、ケヤキ（梁）、エンジュ（梁）、クリ（腰壁）。

――建築組パックス㈲を知ったのはデーリー東北の広告だったとか。

ご主人の話　そうなんです。紙面の下のほうにあった、名刺サイズより一回り小さい広告だったんですけど、目が留まったんです。日にちまで憶えていますよ、2016年10月19日でした。広告に載っていた、太い差鴨居（鴨居と一体になった梁）が架かる昔の家の写真――それに惹かれたんです。その写真のような古民家風に自宅をリフォームしたいと考えていたからなんです。広告主は、建築組パックスという会社で、展示場もあるようです。妻と見に行ってみました。

奥様の話　そうしたら、閉まっていたんですよ。ぜひ中を見てみたいので、広告からメモしておいた電話番号にかけてみました。「10分くらいで行く」とのことなので、板を張った外観や、半円の丸い屋根などを眺めていると、駆け付けてくれたのが大西（大西昇社長）さんでした。

ご主人の話　ヒバの格子入りだという玄関の引き戸が、私好みの和風で、気に入りました。玄関に入って、正面に見えた床の間風の造りにも惹かれまし

杢目のきれいなスギの板を鎧張（よろい）りした玄関回りがいかにも古民家風

改築前は2間続きの和室だったという居間。2階の子供部屋を取り払ってダイナミックな木の空間に生まれ変わった

2階の子供部屋を取り払って造られた開放感溢れる吹き抜け

た。大西さんの説明によると、玄関ホールの正面に下駄箱を置いて、上部に桑の幕板を架け、窓の障子にも、その向かいに建つ居間の入り口戸にも格子を入れて、和風の雰囲気を濃く出したのだとか。上がり框は曲がりのあるケヤキで、ホールの床板は渋いクリ。玄関ホールというよりは、こぢんまりとした床の間にいるようで、ここも良かったです。

それ以上に、リビングに入って見上げた吹き抜けの開放感には圧倒されましたね。居間と台所が一体になった床板の広がりと、1尺もあるという太い大黒柱。まさに、こんな風に今の家をリフォームできればいいのだけど、でも、予算的に手が届くだろうか……などなど、気に入っただけに期待と不安が交じった気持ちで拝見したものです。具体的に大西さんと打ち合わせに入ってからも、展示場を見たくなって、全部で3回も拝見しましたよ。

改築前の家の広さ残す解体費用浮かし内装に

奥様の話　2年前（2015年）に、長女夫婦が家を建てたんです。どこの住宅会社に頼むか、その2年前から娘たちと一緒にあれこれ見て歩きました。八戸市内の展示場はほとんど見ましたし、完成見学会も含めれば全部で40軒くらいにはなるでしょう。その時点では、まだ

吹き抜け部分の壁は漆喰で仕上げられている

改築前の梁にケヤキを張り合わせた居間の梁（上は工事中の様子）

わが家は築20年でしたからリフォームの計画はなかったんですけど、娘夫婦の家の工事が始まって、近くだから主人はちょくちょく見に行っては、娘夫婦とは年代も家の好みも違うとはいうものの、自分ならもっと和風にするだとかあれこれ思っているうちに、だんだんと自分の家も建てたくなってきたんですよ。

――築24年は、建て替えか、リフォームか、微妙ですね。

ご主人の話　大西さんに建て替えの場合のプランもこしらえてみてもらったら、今の家よりも一回り小さな家になりました。子供たちがもう社会に出て、私と妻の2人暮らしだけど、長女に次いであとの子供たちも結婚すれば孫も増えるし、泊まっていく部屋数も必要だし、それにやはり50坪近くある今の家の広さは捨てがたいものがあります。建て替えとなれば解体費も馬鹿になりませんしね。その費用をリフォームに回して、気に入った展示場のような、木に囲まれた昔風の家にしようと決めたんです。

――居間と寝室の場所が入れ替わったのですね。

奥様の話　改築前は、ここ(居間)は2間続きの和室だったんですよ。方角は南東向きで、ふつうならここを居間にするんだけど、南にも東にも接近してアパートが建っていたから、やむなく和室にして、居間は玄関脇

腰壁に渋味のあるクリを使用したリビング

の、今の寝室の場所にしたんです。24年間太陽に恵まれない生活だったんですよ。アパートは、建てて3年ほど後に取り壊されましたが、そのときはもうどうしようもありませんでした。

吹き抜けにケヤキの梁 腰壁には渋味あるクリ

大西社長の話　2間続きを、対面式のキッチンと居間に変えて、その上の、2階の子供部屋を取り払って吹き抜けにしました。開放感と、午後も陽が射し込むように吹き抜けの壁に窓を付けたので明るさも確保できました。

改築前の梁に、ケヤキの板を張り合わせて現わしにし、東側に続く和室との間にも曲がりのエンジュの梁を架けて、本物の木の〝野趣〟を添えました。吹き抜けは漆喰の真壁にして柱に塗装をし、全体の色調に合うよう腰壁には渋味のあるクリを張りました。和室の床の間風に張ったケヤキの板も、木は全

居間続きの和室。床の間風に張られているのはケヤキの板

部、当社の加工場にストックしておいた県産材です。

奥様の話　玄関から階段を上がっていくと、正面に障子があるから、つい部屋だと思って開けてみたら、そこは吹き抜け――。さすがは建築家で、わたしたちには思いも付かない設計です。そこから太い梁も見えるし、展示場みたいに大きな照明

階段を上がった突き当たりの障子を開けるとそこが吹き抜けになっているところが設計の妙

玄関ホールの左手にある寝室。改築前はここが居間だった

器具も下がっているし、以前の家とはすっかり変わってしまいました。というよりは生まれ変わったのですね。

大西さんは一級建築士で、息子さんが宮大工というところに信頼感がありました。下請けの大工だと、打った釘が下地から外れて突き出ていても気にもしないそうですけど、主人は、そういうことは嫌いなんです。やはり、見えない所もきちんとしていないとね。息子さんの仕事ぶりは実に丁寧でしたよ。ヒバの柱に残っていた刻みの跡を、木で埋めて、手で触っても分からないくらいに綺麗に仕上げたのには、さすがは宮大工って感心したものです。

ご主人の話　あの小さな広告に書かれてあった『古民家リフォーム』というネーミングも良かったんですよ。古民家風にリフォームする――って誰にでも分かるもの。それで、じゃ展示場を見に行ってみよう、となったんです。

PACS
Perfect Architecture Consulting System
建築組パックス有限会社
八戸市大字新井田字石動木平1-1
TEL.0178-25-6020 FAX.0178-25-5542
http://kenchikugumi.jp
E-mail:pacs@kenchikugumi.jp

企業組合 県木住

里山へGO!

自然の生態系に触れる 森林体験に 県木住協賛

佐藤時彦代表のコメント

普段、『木っていいなあ』と意識することはそうそうないと思う。周りを見渡せば木でつくられているものはたくさんあるけれど、他の材料と比べるなんてことはまずないので、木だからこそいいんだと感じることは少ない。

触って、見て、かいで 子供たちに五感で木を

けれど我々人間の暮らしの中で、かなり木は『お役立ち』してくれている。我々の暮らしの必要3要素『衣食住』で考えてみる。木の洋服はまずないので『衣』はわきに寄せておいて、『食』と『住』。『食』の場面では木のお皿があるし、お箸、お椀、まな板、鍋の取っ手、バターナイフなんかも木のものもある。『住』の場面でもたくさんある。テーブルやいすなどの家具、家をつくる柱や階段、ドア、床もほぼ木だ。一方ではプラスチック製品などの工業化製品にとって代わられているという現状もある。

木の仕事をする我々は、木に対して気持ちが入りすぎるあまり、子供たちに『これも、あれも伝えねば』と張り切ってしまう。でもあまり難しいことを押し付けずに、子供たちには、木や樹とのよい思い出をたくさん作ってもらえばいいのではと思う。

頭で木のことを知るよりも、触って、見て、においをかいで、と五感で木をたっぷり感じてもらう機会を作り続けるのが、我々がやるべきことだと思う。

子供たちが大人になって、いざものを買うとき、比べるときに、『何か木のものを選んじゃう』となればそれでもう十分だ。

余談になるが、子供たちに新築の家の外観を見せて、植栽木がしっかり植えられている家と、ただ家だけぽつんと建てられている家を見せると、庭木のある家の方が〝かっこいい〟というらしい。自分の暮らしの回りにも人間って緑を置きたくなるんだと思う。それはやっぱり気持ちがいいからだ。

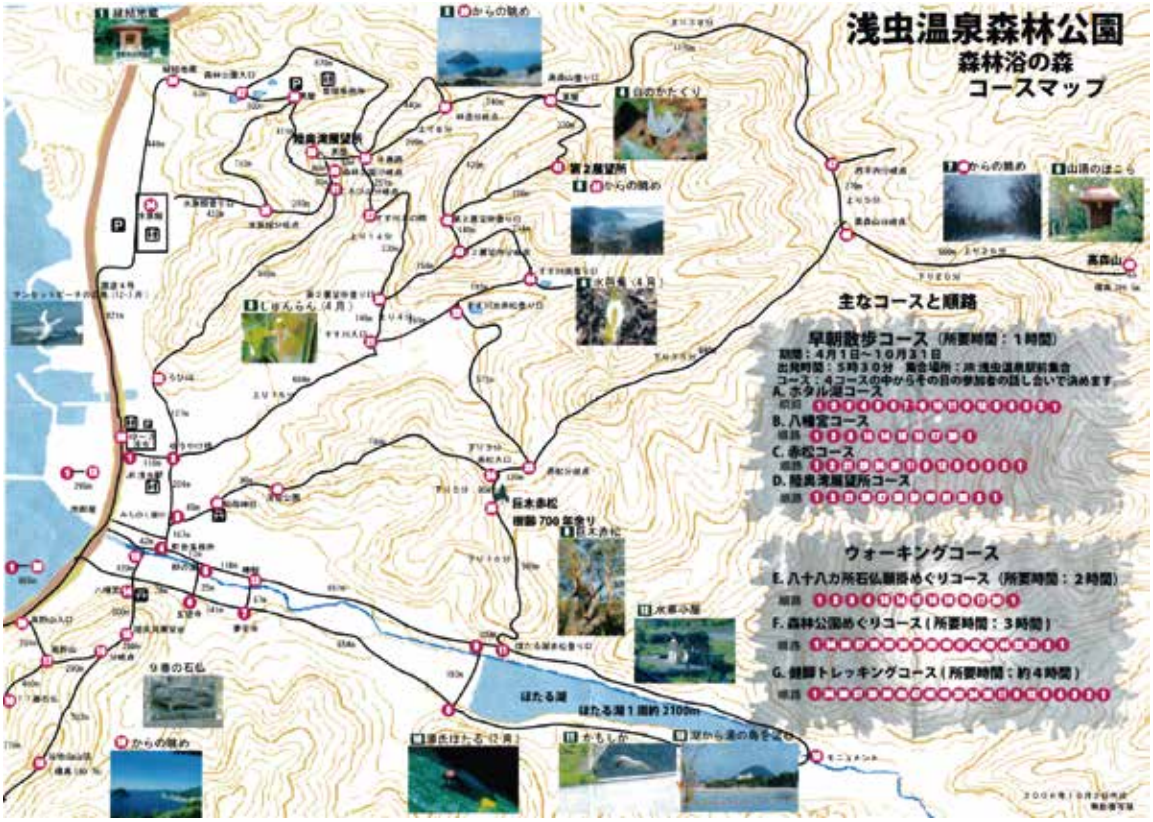
浅虫の森林公園を散策しながら自然と触れ合おう――『親子で参加　里山へGO！』。てっきり企業組合県木住（佐藤時彦代表）の企画だと思ったのは、県木住のブログで知ったから。主催はNPO法人おどろ木ネットワーク（竹村松博理事長）で、県木住が協賛なのだった。――家を建てるということは、その地域に根ざして暮らすこと。その観点から、地元の山で育った木で建てる家づくりを展開している県木住の姿勢は、樹木を含め多様な動植物が棲息するその地域の自然と触れ合う活動と共鳴する。8月11日「山の日」。51人が参加した「里山へGO！」に同行した。

親子でウォーキング 身近にも多様な動植物

「浅虫森林公園」と聞いても場所がどこなのか分からない人も、「浅虫水族館」の裏側といえばピンとくるだろう。3回目となる「里山へGO！」は、そこで行われた。ガイド役は森林セラピストの野宮正宣氏（あおもりクア〈健康〉ガイド協会会長）。ウォーキングだけなら「陸奥湾展望所」（標高１２０ｍ）まで登って下る1時間もかからない身近なコースだが、その途中途中に、実に様々な動植物が棲息していることを、野宮さんは2時間かけて丁寧にガイドしてくれた。

歩く前に全員でストレッチ。足首や体をほぐしてから、1班、2班に分かれて登り始めた。間もなく野宮さんが、「この木の半分はもう枯れています」と指差して、「枯れた木や弱っ

木が枯れる“しくみ”について説明するガイドの野宮さん



た木にはこのようにキノコや虫がつきます。その虫をキツツキが食べる。倒れてくれば危険だからと人間が全部伐り倒してしまえばキツツキが生きられなくなるんです」。枯れ木は最後にキノコがきれいに分解して土に還し、植物がもう一度栄養分として使えるようにしてくれる。「そのように自然は循環するようにうまくできているんです」と野宮さんは加えた。

道端の細い枝を手折って野宮さんが、「匂い嗅いでごらん」と男の子に差し出した。鼻先に持っていって、「あ、いい匂い」。隣の女の子も、「ほんとだ。いい匂い」。「これ、クロモジの木なんです。和菓子を食べるときの『ようじ』になる木です」。次に野宮さんが黒いかたまりを手のひらにのせて、「これ、何でしょう？」。首をかしげる子供たちに、「クマのフンです！」と驚かせたが、すぐに笑って、「というのは嘘で、これはホオノキの実なんです。落ちた初めは緑色をしていますが、それが黒く変色したんです」と種明かしをした。

「クマのフン！」と聞いて、真実味があったのは、実はつい最近、この森林の中でクマを見たという目撃情報が寄せられていたからだ。ここから高森山（標高386・5m）へ至るコースに子熊が現われたらしい。子熊がいるなら、近くに親熊もいる。浅虫にお住いの野宮さんの畑でも、畝にクマの足跡が残っていたというから、実際にいるのだ。

クマの写真はまだ撮ったことはないが、タヌキならある、と野宮さん。自宅の窓から撮影したそうだ（この日の午後に行われた講座でスライドで披露してくれた）。まるまると太っているのはエサが豊富だからで、秋になれば裏庭のイチョウから落ちる銀杏をことごとくたいらげてしまうのがこのタヌキなのだそう。

和菓子を食べるときの「ようじ」になるクロモジの木

急な石段を登り詰めると、一気に視界が開けた。展望台だ。すぐ目の前の陸奥湾に浮かぶ、おにぎりみたいに形のいい島はカタクリの花で知られる湯の島（標高132m）。その右手に見える、亀にそっくりの島は、てっきり「亀島」だとばかり思っていたら、カモメがやってくる「カモメ島」というのだそうだ。カモメをゴメとも呼ぶからゴメ島とも。

葉っぱの上に小豆大の黒い実をのせているのはハナイカダ。葉の上に実をつけるのはこのハナイカダだけだそうだ。亀の甲羅のような葉をして赤い実をつけているのはオオカメノキ。3枚なのが見分け方のコツの葉は、触ってはいけないツタウルシ。小梅ほどの大きさの緑色の実は、和製キウイフルーツのサルナシ。「ほんとだ、キウイだ」と、かじってみた子供たちから歓声があがった。

葉の上に実をつける珍しいハナイカダ

枝が何本にも分かれて伸びているケヤキ

「あれは何の木ですか？」と質問が出た。その男性が指差す先に、特異な樹形の木が見えた。臼のように膨らんだ太い幹。地上３ｍほどのその途中から、細い枝が何本にも分岐して高く伸び立ってる。金木の十二本ヤス（ヒバ）を連想させるこの木は、ケヤキだそうだ。

春から夏にかけて伸びた枝のうち降り積もった雪から飛び出た部分は寒風にやられる。伸ばしては枯れる、伸ばしては枯れるを何年も繰り返している間に幹は太くなる。そのうちに寒風に負けずに生きのびる枝が出てきて、その枝もだんだん太くなる。何十年も何百年も生き延びてきた姿が、この樹形なのである。

そのケヤキに呼びかけるように、野宮さんが口に両手をあてて、「ヤッホ」。参加者たちを向いて、「ヤッホー、と延ばさずに、ヤッホ、と切る。はい、では、いっしょに、ヤッホ」。直後、やまびこが跳ね返った。もう一度、ヤッホ。今度は展望所のある山の上へ向けて、ヤッホ。みんなで、ヤッホ、ヤッホ……。

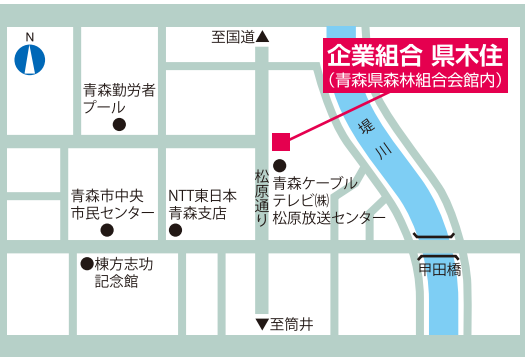
森林にこだましたその声は、姿は見えないけれどどこかにひそむクマにもタヌキにも、キツネにもカモシカにも、アカゲラやコゲラといったキツツキにも届いているに違いない。

成長していく子供たちの心の中でも、この日の体験から跳ね返ってくるように、ヤッホと響き続けていてほしいものだ。

サルナシの実はキウイの味がする

県木住では「木の家を建てる」ほかに子供たちが「木に親しむ」取り組みや、建築士を育てようと中学生に工事現場を見学してもらう「職場訪問」などの活動も行っている。

青森の木で家をつくる　企業組合
県木住
企業組合 県木住
青森市松原1丁目16-25（青森県森林組合会館内2F・3F）
TEL.017-732-5333　FAX.017-732-5777
http://www.kenmokujyu.com　E-mail : info@kenmokujyu.com



企業組合 県木住

リノベーション
ユーザー訪問

M様邸

DATA
上北郡東北町　2016年11月竣工
■延べ床面積／62坪（205.78㎡）
■使用青森県産材／ヒバ（一部土台）、スギ（柱、床）、アカマツ（梁）など。

祖父の家を〝引き継ぐ〟柱や基礎生かして使う

M様邸の外観は、誰の目にも新築だとばかり映るだろう。家の中もそうで、以前は和室の続き間だったとは思えぬワンフロアのLDKの開放的な生まれ変わり様。ご夫婦と、お母様と、ネコちゃん6匹にワンちゃん1匹の大家族。取材中、いつの間にかリビングの座卓の下にワンちゃんがもぐり込んでいた。そばからネコちゃんたちも様子をうかがっている。その静かなこと。躾の良さだ。「良いのが撮れましたよ」と、ご主人がアイパッドの写真を見せてくれた。薪ストーブの前であお向けにひっくり返ったネコちゃん。快適な住み心地を表現するこれ以上のものはない。

――初めからリノベーション（改修）の計画だったのですか。

奥様の話　築44年になるので、解体して建て替えることも考えました。今の家に暮らしながら隣の敷地内に建てれば工事中引っ越ししなくてもいいし、でも、そこは道路より低くなっているから大雨の時には水が流れ込むのでやはり現在地に建て替えようかとか、そうなると引っ越ししなきゃならないし、あまり遠くだと農業をしている主人が何かと不便だし……などなどあれこれ悩みました。

家の北側の道路（県道）は緩い登り坂になっていて、そこから分かれて玄関前を畑へ向かう東側の道は下り坂になっています。その分岐点に建っているので、建てる前に、土地の高低差をなくして平らにするために土留めを回したのでしょう。分厚いそのコンクリートも撤去して、一から建て替えるとなると土留めの撤去費だけでもびっくりするくらいかかると佐

あったかな薪ストーブの前でくつろぐネコちゃん

和室にあった4寸5分角の太い柱はリビングの大黒柱に使われた

藤さん（佐藤時彦代表）から聞きました。そのこともあって、土留めはそのままにして、その下のスペースは車庫として生かし、建物も、柱や欄間など使えるものは使って、祖父が建てた家の一部を新しい家に引き継ごう――というところに夫婦の意見が落ち着いたんです。

ご主人の話　代々農業をしていまして、土留めの下で昔は豚を飼っていたようです。豚舎ですね。

佐藤代表の話　土留めもそうですが、家の基礎も、かなり頑丈に造ったもので、まだまだ大丈夫でした。それでリノベーションを薦めることにしました。和室には4寸5分角の太い柱が使われていて、とくに樹齢200年くらいと思われる床柱のイチイの木は見事でした。間取りが大幅に変わるので全部の柱は残せませんでしたが、リ

〈改修前〉和室の床柱として立っていた樹齢200年のイチイの木

〈改修後〉キッチンと家事コーナーの仕切りに化粧としてイチイを生かした

ビングに大黒柱代わりとして太い柱を残しましたし、イチイの木はキッチンと家事コーナーの仕切りに化粧として立てました。M様ご夫婦の、ご先祖をうやまうお気持ちは継承されたはずです。

2階の洗面台のネコちゃんをかたどった扉の中は猫トイレ

水回りも清潔感あふれるスペースに生まれ変わった

——リフォームとリノベーションの違いは。

佐藤代表の話　クロスの貼り替えなど表面的な小工事のリフォームに対し、建物を骨組みだけにして、今の生活に合うよう間取りを組み換え、耐震や断熱・気密など住宅性能も向上させる大掛かりな工事がリノベーションです。M様邸はまさにそうで、新築並みに断熱・気密性能も向上しました。

奥様の話　以前は、仏壇の花瓶の水が凍って割れたこともありました。室温がマイナスだったんですね。今は真冬でも薪ストーブ1台で家全体が暖かくなります。2階も、廊下の端に立っている煙突の熱で暖かくなるんです。義母がつい習慣で、食事の残りをキッチンに置いたままにしておくと、すぐに傷んでしまいます。以前だと寒くて冷蔵庫に入れなくてもよかったですからね。

ご主人の話　以前は昔の家だから、冠婚葬祭に備えて10畳の和室が3つも並んでいました。そこは普段は使いませんし、台所と居間も離れていて、居間に料理を運ぶのはお客さんが来た時ぐらいで、ほとんどは台所にいましたから、1階2階合わせて70坪あった家の3分の1しか使っていなかったんですよ。3分の2は〝血が通わない〟みたいに、暗くて寒い部屋でしたね。

奥様の話　北向きだった義母

家全体を暖めることができる薪ストーブ

リビングとひと続きになった開放的な和室

の寝室も、屋根からの落雪がいつまでも残るから寒くて、暗かったんです。今はいちばん陽当たりのいい、以前の居間だった場所が義母の部屋です。すぐ隣がリビングで、薪ストーブの熱を取り込もうと壁面の上部に設けた木製の「欄間建具」から入ってくる暖かさと、お日様だけでひと冬過ごしましたよ。ネコたちもそこで母と一緒に昼寝をしています。

職場の上司も県木住で〝地域に根ざす〟に共感

――県木住との出会いは。

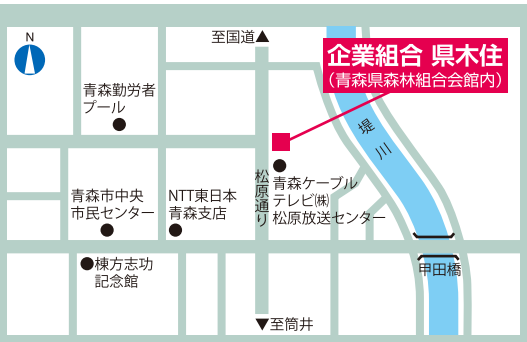
奥様の話　わたしの職場の上司から、完成間近になった自宅の外壁の板の塗装を手伝ってほしいと声がかかったんです。去年の2月でした。上司が土地を探していることは知っていましたけど、建てていることはそのときまで知りませんでした。手伝いに行って、県木住の佐藤さんと初めてお会いしました。これも何かの縁でしょうから、佐藤さんに家のことを相談してみることにしたんです。

　実はその前、ある会社と見積もりまで作業を進めていたんです。でも、見積もりを持ってくるたびにじわじわと金額が上がるし、無垢材じゃなく合板を使っている割にはずいぶん高いなと不満を抱くようになって、それが伝わったのか営業マンが来なくなりました。入れ代わりに佐藤さんと出会ったというわけですね。

　県木住のことは「本」（『青森県産材でエコな家づくり』）で知っていました。読み出したのはたしかNo.Ⅱ号からでしたけど、毎回載っていて、こんな木の家がいいなと思っていたんですよ。ヘルメット姿の上司がチェンソーで大黒柱にするスギを伐り倒している写真もその本で拝見しました。地元の山のスギを積極的に使う県木住の姿勢に、わたしも共感を覚えていました。

　地域に根差した家づくりをしているからこそ、44年前にこのあたりの山の木を使って建てられた祖父の家を〝生かしたい〟という、こちらの気持ちを佐藤さんは大事にしてくれたんだと思うんです。普段使っていなかった和室も日常生活の空間になりましたし、義母の部屋も明るく暖かくなりましたし、祖父も喜んでくれているでしょう。

青森の木で家をつくる　企業組合
県木住
企業組合 県木住
青森市松原1丁目16-25（青森県森林組合会館内2F・3F）
TEL.017-732-5333　FAX.017-732-5777
http://www.kenmokujyu.com　E-mail : info@kenmokujyu.com



企業組合 県木住

自宅で『雑穀料理教室』水曜日には『カフェ』も

『料理教室＆(水)雑穀カフェ』――そう書かれた看板が、髙杉健太様邸の敷地の入り口の、木の切り株に掲げられてあった。玄関脇にも『水曜日だけの雑穀カフェ』の看板が。これのことなんですよ、と奥様が見せてくれたのは『ホホラカメつぶつぶ雑穀料理教室』のパンフレットであった。今年(2017年)2月に完成したご自宅で、奥様の多希さんが雑穀の料理教室を開いているのだ。6月からは、水曜日だけ開いているという雑穀カフェ『Wasamodora(わさもどら)』も。窓から窓へ通り抜ける風が心地よい板張りのリビングで、料理教室のことから伺った。

ユーザー訪問

髙杉 健太 様邸

DATA

弘前市新里字中樋田29-17　2017年2月竣工
- 延べ床面積／31.25坪(103.52㎡)
- 使用青森県産材／ヒバ(土台)、スギ(柱、大黒柱、床、一部外壁)、アカマツ(梁)。

――雑穀料理を始めたきっかけは。

奥様の話　ホームページの「自己紹介」にも書いてあるんですけど――『長男の出産を機に独学で、減塩、肉なし、牛乳なしの「なんちゃってマクロビ(穀物菜食)」をしていました。これで健康になるはず！　と思っていた料理は、夫に不評。さらに私自身も原因不明の激ヤセで、43kgに。そんな時に出会ったのが、つぶつぶの料理でした。自然海塩をしっかり利かせた料理は夫にも好評。体重もいつの間にか増えていました』

育児にしても食べ物にして、昔ながらの〝自然〟に根ざした生活が大事だと思うようになってきたんです。自分が母親に育てられたように、オムツは紙じゃなく布オムツを使って息子たちを育てたんです。紙オムツといっても石油が原料の化学製品が含まれていますしね。布オムツのほうが赤ちゃんだって柔らかくて肌触りがいいはずだし、洗えばまた使えるからゴミも出ませんしね。

食べ物にしてもそうです。健康の基本は食事です。塩分が多かったり、甘すぎたり、カロリー

「木」に囲まれた自宅で「雑穀料理教室」と「雑穀カフェ」を開いている奥様の多希さん

が高かったりと健康に問題がありそうな食品が溢れている中で、昔から東北地方の人たちが食べていたアワとかヒエ、キビなどの雑穀を見直し、一粒一粒に栄養素がバランス良く含まれている雑穀を使って体にいい料理を作るのが『つぶつぶ雑穀料理教室』です。つぶつぶとは、雑穀の愛称で、それぞれの雑穀の持ち味と、野菜と日本伝統の調味料とを取り合わせた料理を創作するんです。毎日が楽しくなりますよ。

――『ホホラカメつぶつぶ……』の「ホホラカメ」とはどんな意味ですか。

奥様の話　津軽弁なんですよ。わたしの父も母も、うちの息子のことを「ホホラカメだなぁ」って笑ったものですよ。「お調子もの」とか、ひょうきんとか」そんな意味なんだそうです。孫の可愛いさを朴訥に言い表した方言なんでしょう。あったかい響きがありますよね。それで付けることにしたんです。

――十和田で石井ともみさんが開いている料理教室に通われたとか。

奥様の話　主人の転勤でまだ八戸に住んでいたとき、友人からの情報で、石井ともみさんのことを知りました。『つぶつぶ雑

リビングとひと続きの対面式のオープンキッチン

穀ｃｏｏｋｉｎｇｓａｌｏｎもみの木』という料理教室を開いている、と。まだ石井さんがお家を建てられる前で、公民館とかを借りて教室を開いていました。石井さんのご自宅が完成したのは４年前（県木住施工）で、その１か月前に、主人の転勤でわたしは弘前に戻ってきていましたけど、石井さんのご自宅での教室に通っていました。わたしが料理コーチとなって教え出したのは去年（２０１６年）の１月からです。

板敷の居間を風が通る窓から真正面に岩木山

――また転勤になれば、これからはご主人は単身赴任ですね。

ご主人の話　（うなずきながら）いつまた転勤になるか分かりませんからね、弘前にいる間に建てようと思ったんです。土地探しから始めました。妻が料理教室を開くので駐車スペースを広く取らなければなりませんでした。子供の小学校からもそう遠くない場所に１６３坪という条件に合う土地が見つかりました。次は住宅プランです。その時点ではすでに私も妻も県木住に建ててもらおうと決めていましたから、佐藤さん（佐藤時彦代表）にアパートに来ていただいて、３人でそれぞれ間取りを書いてみようということにしました。

１階は料理教室にもなるので広いワンルームのリビングと対面式のオープンキッチン、ダイニング、２階が主寝室と子供

窓から窓へ心地いい風が吹き抜ける広々とした板張りのリビング

部屋です。北側にある柿の木が見えるように掃き出し窓にすること。リビングの南側も掃き出しにして風通しを良くすること。石井さんのご自宅のように床板は足に感触の良いスギ、天井には太いアカマツの梁を現わしに――そのへんは妻の要望と同じでした。

奥様の話　それと窓から岩木山が見えるように、ですね。一般に道路に平行に家を建てることが多いと思うのですが、道路に平行に建てれば、西側の窓から真正面に岩木山が見えなくなるんです。地図で測ってみたら15度ずれるのです。それで西窓と岩木山を正対させるように家を配置しました。キッチンの窓からも、デッキからも、2階のフリースペースやトイレの窓からも、バルコニーに出ればそこからも見えます。子供の頃から見慣れている岩木山ですからね。見えるというより、逆に岩木山に見守られている感じですね。

キッチンの窓から岩木山が真正面に見える

佐藤代表の話　私もプランづくりに参加はしたものの、ほとんどはご主人と奥様が考えられたもので、私は家の外観をまとめる程度でした。自分たちの家は自分たちで考えたい――そんなご夫婦の思いが伝わってきました。

　ご夫婦それぞれ家づくりについての要望を書き出したメモを拝見すると、ご主人の要望は①風通しが良い②居間は広く③薪ストーブの前で昼寝ができる。奥様は①人が来やすい家②風が入る、出ていく家③風にたなびく洗濯物――など。外からの人の視線は気にならないから窓ガラスは透明でいい、というのもご夫婦共通でした。窓が大きく、明るく、風が通り抜ける、開放的な家――がイメージとして浮かびました。

ご主人の話　もともと大手のハウスメーカーに頼むつもりはありませんでした。建てるというより、既製品の家を売り付け

現わしの天井に架けられた頑丈そうなアカマツの梁

和室に設けられた風通し用の小窓

薪ストーブの煙突が2階ホールを暖める

られるような感じがあって、私には合いませんでした。任せる、のではなく、参加する家づくりですね。県木住の「施主参加型の家づくり」がまさにぴったりで、初めてのチェンソー体験で伐り倒した樹齢60年のスギの樹が、その(リビングに立っている2階までの通しの)大黒柱(約18㎝角)になりました。

「地元の木で建てたい」伐採したスギで大黒柱

佐藤代表の話　高杉様から資料請求のメールを頂戴したのは去年の3月でした。「地元の木で家を建てたい」とコメントが添えられていました。お客様のほうから「県産材で」と要望されるのは、珍しいことです。石井様とつぶつぶ雑穀を通じたお付き合いだと知って合点がいきました。いわば〝自然を大事にする仲間たち〟ですからね。さっそく翌日、資料一式をお届けしました。石井様邸が紹介された「本」(『青森県産材でエコな家づくり』No.Ⅳ)も袋に添えて。

奥様の話　石井さんのお宅が

廊下の突き当たりにある木の扉と化粧タイルがマッチした“かわいい”洗面台

伐る前の立木

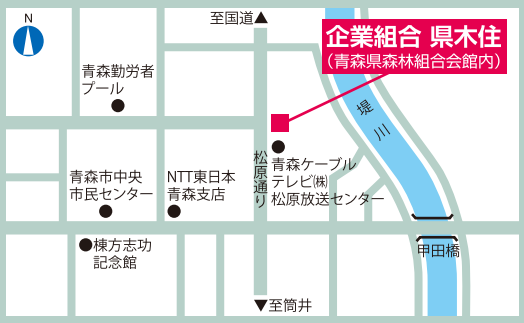
チェンソー体験で伐り倒した樹齢60年のスギの樹が、
リビングの大黒柱として使われている

玄関に置かれた伐倒記念の丸太のイス

子どもたちに人気のハンモックが取付けられた２階のフリースペース

県木住で建てたことは知っていました。お邪魔するたびに木の香りのする室内を「いいなぁ」と眺めたものです。佐藤さんが届けてくれた資料の中に、完成見学会の案内のチラシも入っていました。その見学会を、主人が先に一人で見に行ったんです。わたしはその日、何か用事があっていなかったのでしょう。翌日、主人に誘われてその家を家族４人で見に行きました。十和田の石井さんのお宅を主人はまだ見たことがありませんでしたから、今度はわたしが石井宅へ案内しました。木をたくさん使った家の造りも良いけど、その根底にある、地域の〝自然〟を大事にするという県木住の姿勢が、わたしたち夫婦にはぴったりでしたね。

佐藤代表の話　奥様が弘前工業高校の建築科卒業なので、建築を理解されているから話が通じて、打ち合わせがとても楽でした。平面図だけでなく、室内の物の配置や、食品庫の棚の高さを詳細に描いた展開図まで準備していただきました。完成見学会のときにも、奥様が手書きの間取り図に、例えば「トイレの便座は木製」など〝見どころ〟を書き入れた上に、奥様自ら接客もしてくださって大助かりでした。育児も食べ物も住まいも〝自然〟が基本――その大事さが、ここから広く発信されていくことを願います。

【ホホラカメつぶつぶ雑穀料理教室】
ホームページの「レッスン一覧」に日時とメニューを紹介。
一例…受付中　食べ応えあり！見た目も豪華♥木の実の雑穀パイ（２０１７）　10／29　13：00～15：00　４５００円（税込）
【水曜日だけの雑穀カフェ「Wasamodora」】
11：00～15：00（臨時休業あり）
■住所
弘前市新里字中樋田29-17
■https：//www.hohorakame.com
■問合せ
hohorakame@gmail.com

青森の木で家をつくる　企業組合
県木住
企業組合 県木住
青森市松原1丁目16-25（青森県森林組合会館内2F・3F）
TEL.017-732-5333　FAX.017-732-5777
http://www.kenmokujyu.com　E-mail : info@kenmokujyu.com